

水運遺産に関する研究

関根理恵*

要約

本研究では、ケンブリッジを研究対象とし調査を行い、歴史的都市から文化的所産を読み解き、水運遺産がどのように残されているのかについて考察した。

研究の結果、中世都市が姿をとどめていると言われているケンブリッジであったが、歴史的建造物は形を変えながらも残っていたが、橋や河岸、水路、水車などの水運遺産について歴史学的観点から調査を行うと、歴史的な文化的所産は、まったく残っていない、もしくは、ほとんど形を留めていないということがわかった。以上のことから、産業遺産や土木遺産など、日常生活に深くかかわっている文化的所産は、意識して保護しなければ保存することができないということがわかった。産業遺産および土木遺産、水運遺産などの運輸関係の遺産は、保全方法および積極的保護措置が未だ確立しておらず、今後積極的に保存方法を考え、利用しながら保護しなければならない文化遺産の1つであるといえる。

本研究の目的

水運は、コミュニティを結ぶ重要な役割を果たす。世界各国の港湾都市や商業集落である河岸は、歴史とともに発達し、広範囲にわたり絶えず進化してきた。

そこで今回は、イギリスのケンブリッジを事例とし、ケム川を基軸に、ケンブリッジ市街の自然的、歴史的、社会的文脈の中から、人類の文化的活動によって構築された文化的所産（文化遺産）を読み解き、Living Heritageである水運遺産について考察する。

研究対象：水運遺産

本研究では、世界遺産条約で定義される「文化遺産」を対象とする。文化遺産は、記念物、建造物群、遺跡の3つに分類される。また、世界遺産

条約履行のための作業指針（オペレーショナルガイドライン）にて規定される「文化的景観」も文化遺産に含まれる。

水運遺産とは、運河、河岸、船着き場、木場、水閘門、市場、橋梁などの、水運に関する遺跡や歴史的建造物、水辺景観、自然と人工の構造物がおりなす特徴ある風景等を指す。

調査地の概要

今回調査を実施したのは、イギリス、イングランド東部ケンブリッジシャーの州都であるケンブリッジ（Cambridge）にあるケム川である。ケンブリッジは、ロンドン中心地より北北東80kmほどに位置する市である。

地理的特性

ケンブリッジを象徴するケム川だが、ケム川の特徴は、河床勾配がゆるやかで川の流れがゆっくりしている点であり、これは船の操縦がしやすく容易に移動ができる⁽¹⁾という利点になっている。

2020年11月30日受付

* 江戸川大学 現代社会科学准教授 芸術学、文化財保存学、国際文化政策

このようにゆっくりとした流れが穏やかな場所は、小型の渡し船やフェリー、橋、浅瀬からのアクセスなど、様々な方法で対岸へ渡りやすい場所となり得、それは必然的に交通の要所であることを同時に意味している。

川の流れがゆっくりとした「渡し」の場所となる条件は、①川が蛇行する場所であり、②沖積平野にあり、③川幅が適当に狭くなっている場所である必要がある⁽²⁾。

ケンブリッジ市街を流れるケム川は、泥質の堆積物が多い。そのため川底が浅いことから、パントと呼ばれる平底小舟を使って物資を輸送したり移動したりすることができる。

河川路は、船を利用することで大量の物資が早く輸送できる特性があり、ケンブリッジは、商業の中継地点としての機能を果たした。

また、ケンブリッジには、ローマ街道も通っており、この古代路をつかって陸路で移動することも有益な移動手段であった。

このような背景から、交通の便の良いケンブリッジは、大都市イーリー (Ely) の中継都市、および商業都市として栄えた。

ローマ街道との関係性

ローマ街道が、ケンブリッジの約 16 miles 南東に位置するハーバーヒル (Harverhill) や、約 10 miles 南に位置するグレートチェスターフォード (Great chesterford) を継いでおり、まっすぐこれらの街へとケンブリッジ市内より街道が延びている。

ケンブリッジは、これらのローマ街道からケム川へ直接アクセスすることができ、陸路から河川交通へと切り替えることができる場所でもあり、交通の要所として栄えた。

ケンブリッジの歴史

ケンブリッジの町の存在の記録は、史料に残されたケム川とグラント川の橋の側に築かれた城に関する記述により AD. 875 年にまで遡ると言われ

る。ケンブリッジ市街の発祥は、ケム川左岸、つまり現在「the Cam」と呼ばれているエリアから町が発達したと考えられている⁽³⁾。ケンブリッジの名は、ケム川に由来すると一般的に言われているが、いつの時代からケンブリッジという呼称になったのかは定かではない。

一方で、ノルマン朝時代には、「Grentebr's cire」もしくは、「Grentebrige」と呼ばれていたことが、ノルマンディー公ギョーム 2 世 (The conqueror, 征服王) が、AD. 1085 年にイングランド王に着座後、ウィリアム 1 世として行った検地台帳 (通称 Domesday Book) の記録で確認することができる (図 1)⁽⁴⁾。

Domesday Book は、土地のみならず、資産や所有する家畜など課税の対象となる資産を記録したイギリス最古の公文書である。Domesday Book のケンブリッジの町に関する記録では、司祭が所有する土地や資産も見受けられ、町には教会が存在していたことが把握できる。つまり、11 世紀にはすでにある程度の規模を持つ都市であったことが推測できる。

周辺地域とケンブリッジの関係

ケンブリッジの北には、イースト・アングリア王国⁽⁵⁾ というイングランドの七王国時代の小王国の主要都市の一つであるイーリー (Ely) が位置している。イギリスにおける古典的教会史として有名な Bede が著した「Historia ecclesiastica gentis Anglorum (IV, xix)」に掲載されている Elge が現在の Ely に当たると考えられ、その後、ラテン語の写本類には Elia, Eli との記載が認められる⁽⁶⁾。

イーストアングリア王国の王女 Saint Etheldreda にこの地が与えられ、AD. 673 年に修道院が建設された。

AD. 869 年もしくは AD. 870 年ころにデンマーク人の襲来によりこの修道院も町の家々も破壊された。その後、同地にウィンチェスター司教の協力の下、AD. 970 年にベネディクト修道院として再建がなされた。

GRENTBRISCIRE.

BURON DE GRENTBRISTE: p uno bondari
 se defend. T. h. l. In hoc burgo fuer. 7 sunt
 decē custodie. In prima custodia. L. iii. ma
 sure. ex. h. s. l. sunt. Wasse. In hac pma custodia hō
 Alan om. u. burgenset nichil reddent. Comes mori
 zmentis de rā iudicet. h. iii. mansur. 7 ibi sunt. iii.
 burgenset q. T. h. l. reddē. v. sol. 7 un. den. 7 i. obola
 in nichil reddunt. Radulf. de hant. h. in burgo
 nichil reddent. Roger. hō epi. Romigi. in burgo
 nil redd. f. rheniger. h. u. burgo. nichil reddē.
 h. y. cad. una custodia p duob. cōputabit. T. h. l.
 sed p castro sunt destruce. xxvii. dom.
 In secda custodia fuer. xl. vii. mansur. T. h. l. ex. h. s.
 tur. sunt. Wasse. de h. s. l. xii. mansur. nichil reddē.
 red. xxx. reddē om. cōsuetudines. de h. s. l. Alan
 v. burgo. nil redd. 7 ex. manes in t. r. anglos.
 In tertia custodia. T. h. l. fuer. xl. i. mansur. Ex. h. s. l. sunt
 xi. Wasse. red. xxx. reddunt om. cōsuetudines.
 In quarta custodia. T. h. l. fuer. xl. v. mansur. Ex. h. s. l.
 xxiii. h. s. l. Wasse. red. xxx. redd. om. cōsuetud.
 In quinta custodia. T. h. l. fuer. l. mansur. Una ochō
 ē. Wasse. al. p om. reddunt cōsuetudines suas.
 In sexta custodia. T. h. l. fuer. xxxvii. mansur. Tres
 feodag hō. de h. s. l. mansur. f. nichil reddē.
 In septima custodia. T. h. l. fuer. xxxvii. mansur. Ex. h. s. l.
 qdā pōt una tener. 7 nichil reddē. f. h. s. l. Wasse.
 In octava custodia. T. h. l. fuer. xxx. v. mansur. Ex. h. s. l.
 In nona custodia. T. h. l. fuer. xxx. v. mansur. de h. s. l.
 In decima custodia. T. h. l. fuer. xx. v. mansur. Ex.
 h. s. l. h. s. l. Wasse. tam se defendunt.

De cōsuetudinib. hui. uill. vii. lib. p annu. 7 de
 Land. gable. vii. lib. 7 ii. oyy. 7 duo den.
 Burgenset. T. h. l. accomodabāt uiccomia carrucas
 hui. t. r. in anno. modo nouē uicib. cogunt.
 Nec aurat nec cur. T. h. l. inueniebāt. que in fa
 cti. 4 p cōsuetudine inposita. h. edam. 2. a. 2. sup
 p. cōm. uiccomia. cōm. uic. p. s. u. s. t. b. p. c. u. a. b. l. a. t. a.
 Ipse p. c. o. c. t. e. r. i. b. u. m. o. l. e. n. d. q. a. u. s. e. r. p. a. s. t. u. r. a. 7 p. l. u. r. a.
 s. o. m. o. s. d. e. s. t. r. u. a. n. t. 7 u. o. l. u. n. u. m. a. b. b. e. d. e. l. y. a. l. t. e. r. u.
 Alan. c. o. m. e. s. I. p. s. a. m. o. l. e. n. d. r. e. d. d. e. r. e. l. i. b. p. a. n. n. u.
 de h. a. r. u. e. t. a. l. a. r. e. m. a. n. a. x. h. a. b. u. e. t. q. d. a. p. i. c. o. c. v. i. l. l. b.
 7 u. n. i. p. a. l. e. f. r. i. d. u. 7 u. n. i. m. i. t. r. a. l. a. r. m. a.
 Aluric. Godric. s. o. r. e. q. d. o. f. u. i. t. u. i. c. o. m. e. s. h. a. b. u. e.
 h. a. r. u. e. t. a. u. n. u. s. q. l. o. q. e. . x. l. o. l. d.

Willelm. epe.
 11. E. p. s. Wintoniensis.
 12. E. p. s. Lincolniensis.
 13. E. p. s. Rosoniensis.
 14. A. l. b. a. l. de lly.
 15. A. l. b. a. l. de s. Edmundo.
 16. A. l. b. b. de Ramsey.
 17. A. l. b. b. de Toru.
 18. A. l. b. b. de emland.
 19. A. l. b. b. de Wandrop.
 20. A. l. b. a. n. t. i. l. l. a. de ceteris.
 21. C. o. m. e. s. m. o. r. t. o. n. i. e. n. s. i. s.
 22. C. o. m. e. s. R. o. g. e. r. i. u. s.
 23. C. o. m. e. s. A. l. a. n. u. s.
 24. C. o. m. e. s. E. u. s. t. a. c. h. u. s.
 25. C. o. m. e. s. a. n. o. n. i. c. i. h. a. u. o. c. e. n. s. e. s.
 26. A. l. t. e. r. i. o. s. f. a. r. d.
 27. W. i. l. l. e. m. d. e. W. a. r. e. n. n. a.
 28. W. i. l. l. e. m. s. i. l. i. u. s. G. i. l. l. e. b. r. a.
 29. R. o. b. e. r. t. u. s. d. e. T. o. d. e. n. i.
 30. R. o. b. e. r. t. u. s. g. e. r. m. o. n.
 31. C. o. m. e. s. d. e. m. a. n. a. n. l. e.
 32. I. l. l. e. b. r. a. l. d. e. G. a. n. d.
 33. I. l. l. e. b. r. a. l. s. i. l. i. u. s. d. e.
 34. E. u. d. o. d. a. p. i. f. e. r.

STELLA REGIS. In Staplehothwō.
 Alan. maneriu. rē. p. r. h. s. den. se
 defil. tra. ē. x. u. car. u. s. i. b. i. h. u. s. x. v. u. l. l. i. x. v. a.
 h. o. r. d. cū. x. i. car. In d. n. o. u. car. 7 u. s. s. e. r. u. 7 u. m. o. l. e.
 x. x. i. i. l. b. d. e. p. i. s. c. a. r. u. i. m. i. l. l. 7 d. a. n. g. u. l. l. p. r. a.
 x. x. i. i. car. p. a. s. t. u. r. a. s. a. d. p. e. c. u. n. i. u. l. l. e. s. i. b. i. v. i. i. p. a. t. o. r. e. s.
 p. e. d. d. e. n. t. r. e. g. i. p. r. e. n. t. a. t. o. n. p. i. s. e. r. u. t. e. r. m. a. n. o. s. e. c. o. n. q. d.
 p. o. s. s. u. n. t. In t. o. t. u. a. l. e. n. t. i. s. r. e. d. d. e. p. a. n. n. u. x. x. v. l. b. a. r. s. a. l.
 7 p. e. n. t. i. a. l. 7 x. x. i. l. b. 7 u. n. s. o. l. 7 u. n. d. e. n. a. d. n. u. m. q. r. u.
 d. e. a. l. t. i. s. d. e. n. a. r. p. f. r. u. m. e. o. h. r. a. s. i. o. m. e. l. l. e. 7 a. l. i. s. m. e. n. t. i. s.
 s. t. u. m. e. n. t. i. b. T. h. l. r. e. d. d. e. t. x. x. v. l. b. a. d. n. u. m. q. r. u.

図1 Domesday Book

Domesday Book によれば、イーリー司教は Foxehola の地主でもあり、イーリーの町で権勢をふるっていた。その後 AD. 1108 年、教皇によりイーリーに新規の司教区を設置する提案がなされ、AD. 1109 年ヘンリー1世によりイーリーに新しい司教区を立てることが認められた。これにより、イーリーは地域の宗教的中心地となった。またイーリー司教は、イーリー州で大法官や政治家として辣腕を振るい、同時に大聖堂を豊かにした。イーリー司教区は、もともとリンカーン主教区の一部であったことから、リンカーンとの結びつきも強く、イーリー司教は、ロンドンでも活躍をした。

ケンブリッジは、イーリーとロンドンを結ぶ路線にある都市であり、イーリーからロンドンへ最も早く到着するための手段は、ケム川の河川路を利用する方法であったことから、イーリー司教は、自身に関係が深い権力を持つ司祭をケンブリッジに置き、頻繁に交流をはかっていた。このことにより、ますますケンブリッジは栄えた。

大学都市としての歴史

ケンブリッジの街は、ケンブリッジ大学とともに栄えた大学都市として知られる⁽⁷⁾。ケンブリッジ大学の創立は、AD. 1209 年とされている⁽⁸⁾。W W Rouse-ball⁽⁹⁾ 等によれば、AD. 1174 年にケンブリッジに大火が発生し、その後、再建設の際に石工や大工により今のような学寮付きの大学様式の建造物が建てられたと指摘している。一方で、Willis Robert⁽¹⁰⁾ の建築学的観点から考察した研究結果では、創設期の大学建築はほぼ残っていないことが指摘されている⁽¹¹⁾。以上のことから、ケンブリッジは 13 世紀より前の様子を正確に把握することはできない。

13 世紀初頭より学者らの知的活動の保護を理由に、イングランド国王の庇護のもとケンブリッジは大学都市として繁栄した⁽¹²⁾。

ケンブリッジ大学は、AD. 1280 年に彼は王から憲章を取得し、ケンブリッジのセントジョンの教区病院に住む世俗的な兄弟たちを「勤勉な学

者」に置き換えることを許可したとされる⁽¹³⁾。創建当初、セントジョン教会の建造物を利用しており、いわゆる教会内修学のスタイルをとっていたと見られる⁽¹⁴⁾。その後、創立後少し立って AD. 1284 年に大学として病院として使われていた教会 (Hospital) から独立した 2 つの大学の建造物⁽¹⁵⁾ が、セントピーター教会⁽¹⁶⁾ の横に創建されたと考えられている⁽¹⁷⁾。よって、13 世紀後半から、14 世紀初頭にかけて建てられた建物こそが、ケンブリッジの最も古い歴史的建造物群と考えられる。

中世史におけるケンブリッジ大学の研究では、H. Denifle (1885)⁽¹⁸⁾ や、H. E. Salter (1921)⁽¹⁹⁾、J. P. C. Roach (1959)⁽²⁰⁾ などの先行研究が知られている。しかし、これらの研究の最大の問題は、創設期について議論を展開させているものの、分析する史料で 1 次史料が極めて少なく、2 次史料、3 次史料との比較から論を展開している点にある。

ケンブリッジの歴史が、不明確なまま語られている理由は、農民の反乱 (ワットタイラーの乱⁽²¹⁾) による被害の影響による。

AD. 1381 年 6 月 15 日、ロンドンの農民による暴動の影響を受け、ケンブリッジ市内でも地元農民による暴動が起き、教会や王族に関連する施設、高官の自宅、大学等が破壊され、大学に押し入った暴徒により、大学の私財も破棄されたり、燃やされた。

ケンブリッジでは、ケンブリッジ大学が王から直接手厚い庇護を受けていたことや、司祭が配置され王室との結びつき特に強かったことなどから、大学が有する数々の特権が、農民の反感を買っていたという背景があり、農民は、ケンブリッジ大学を主たる標的とした。そして大学内の教会や大学の私財を奪略するのみならず、大学の知識人達が最も大切にしているものを目の敵にし、図書館やアーカイブに保存されている古文書などの書類をむやみに焼き払った⁽²²⁾。

現在、ケンブリッジ大学の古い公文書類は、ケンブリッジ大学に伝承される Senior Proctor's Book (classmark: UA Collect.Admin.1 ff.60r-

80v), Junior Proctor's Book (classmark: UA Collect.Admin.2 ff.107r-110v), Old Proctor's Book (UA Collect. Admin. 3) に記録されており、史料は閲覧することができる。

この記録は、学長の指揮下で責任を果たした学部長が使用するための冊子簿で、法令、憲章、勅書、命令、宣誓などが総括されている法令集である。その中には、教皇の勅書、特許状などの創建にかかわる事項や公文記録なども含まれる。

この本の中で特定できる一番古い年代は、ウィリアムゴッサム主任教授の死亡記事 (AD. 1385 年) である。しかし、AD. 1396 年以前の記述には、目安となる法令の発布された日付などの詳細な記述が記されていないことから、実際には、年代を正確に検証ができない状態にある。

これらの Book には、もともとは大学の統治に関するすべての法令が記録保存されていたと考えられるが、本のコンディションや記述の様子 (不自然に日付に関する記述が抜けている点) などから、1381 年の農民の反乱以降に再編成され、新規に作成された本である可能性が高いことが指摘されている⁽²³⁾。

状況から総合的に判断すれば、他の研究者達が指摘するように、大学創設期の史料や勅書、公文記録などの大変重要な歴史的史料類は、大方焼失してしまったと見るのが妥当であろう⁽²⁴⁾。よって創設期の 13 世紀から農民の反乱後の復興期 (初期) の 14 世紀にかけて正確な年代を古文書類から導き歴史をひも解くことは、かなり困難な状況にある。

以上のような事情から、ケンブリッジの歴史は、またケンブリッジ大学を中心とした歴史的建造物の建築様式等から時代を推定する建築学的視点による編年作業が試みられてきた。

現在のところ、現存している年代が明らかにわかっている史料群は、16 世紀の史料である。そこで今回は、先行研究の調査を踏まえ、再度、未調査の史料を精査するとともに、先に研究され尽くしたと考えられている資料群を再度解析する。16 世紀以降の史料と歴史的建造物の 2 方向からアプローチをし、文化的景観の考察を加え、ケンブ

リッジの歴史地区および文化遺産の成り立ちや歴史の変遷の検証を試みる。

ケンブリッジ市街に残る歴史的遺産

ケンブリッジ城は、ケンブリッジ市街に残る中世の城跡である。この城は、ウィリアム 1 世によって 1068 年に建設されたと思われる⁽²⁵⁾。しかし現在は、基礎部分を残すのみで、城は残っていない⁽²⁶⁾。

ケンブリッジ大学図書館に所蔵される 1291 年のエドワード 1 世の記録⁽²⁷⁾によれば、この憲章は、大学からの申し入れに対し王室が助成金を出すことを確認する特許証であり、ヘンリー 3 世より付与された大学の特権を確認する証明書である。エドワード 1 世より大学長へと手渡された。

原本であるかどうかを確認するには、炭素同位体による年代測定などが必要となるかもしれないが、シールは、エドワード 3 世の印章と同じであることが確認されている。

以上のことから、13 世紀には少なくとも、ケンブリッジ大学が正式な大学として存在していたことは、ここから確認することができる。

ケンブリッジ大学の校舎は、現在でも利用されているが、最も古いものは、AD. 1280 年代に建てられた建造物群である。一方で、先述のとおり残念ながら火災や暴動により 13 世紀の建造物は残っていない。しかし、その形態を形式的に留める建造物は現在も残っており、ピーターハウスは、道に面している部分が非常に少なく間口が狭く、奥行が深い 1280 年代の修道院形式を今もなお留めている。

14 世紀の創建当初の形態をほぼ留めているのは、ペンブロクカレッジ、ゴービル&カウスカレッジ、トリニティホール、コーパスクリスティーホールである。

15 世紀の創建当初の形態を留めるのは、マダグナカレッジであり、15 世紀の姿を部分的に留めているのは、クリスティカレッジと、キングスカレッジ、クイーンズカレッジである。

15 世紀に創建されたと考えられていたジーザ

スカレッジは、実はもっと古く、AD.1158年創建の建物をAD.1495年まで利用し、16世紀までほぼその形をとどめたままであったことがわかっている。

16世紀に創建されたセントジョンズカレッジとエマニュエルカレッジ、シドニサセックスカレッジは、どれも大幅な改修工事が行われた。

トリニティカレッジは、1317年に創建されたと言われているが、トリニティカレッジは、規模が大きく、AD.1555-1612年、その後川に沿ってAD.1612-1676、AD.1676-1755、AD.1755-現在と、図書館等を増設しながら、4回の増改築を繰り返した。ほぼ、16世紀から18世紀にかけての回廊式の大学である。

クラレンハウスは、AD.1326年創建であるが、規模が小さいこともあり、AD.1638年に創建され、AD.1762年の二回目の改修で道路への道に屋根がついた程度の簡単な改修が行われた。

水運遺産と農林水産業に関する文化的景観

河川景観、池沼景観、湖沼景観、水路景観では、日常生活で用いる生活用水場、滝、祭祀用水場、農業で利用する用水路や水門、堰、水の調節施設、船着き場、ハーバー、溜池、掘割、遊水池、橋や堤などの工作物、堀、浄化施設など地形に左右される自然的要素の強い場所や景観もあれば、人間が作り出した土地利用の形を表しているもの（人工物）、ヨシや葦の生育場所（生産地）などもある。

河岸の定義

河岸とは、河川水流により自然に形成された川岸、つまり水際域の緩やかな斜面および平面（水中部と陸上部）を指す。

本研究では、自然河川のみならず、湖、沼、運河の水際域にできた岸辺や、その水際域に設けられた港や船着き場を指す。また接舷とは、船の側面を、他の船や岸壁に寄せてつけることをいい、ケム川にもいくつかの接舷が確認できる。

斛（はしけ）

斛とは、河川や運河などの内陸水路や港湾内で重い貨物を積んで航行するために作られている平底の船舶である。斛の多くは、エンジンを積んでいないため自力で航行することはできず、タグボート（トウボート）により牽引あるいは推進されながら航行する。

ケム川を往来しているプントと呼ばれる平舟も斛である。このプントこそが水運遺産の構成資産であり、歴史的価値を持っている。

集落と水に関する遺産

集落では、平地、山岳、海岸、河岸、傾斜地等の地形、人間の住みやすさや利用しにくさ（城など、防御のためにあえて利便性の悪い場所に集落を作っている場合もある。）、気候などから、集落を切り開いた開拓者のアイディアによって、いかなるところにも集落はできうる。集落を形成するとき、堀や石垣、防風林、垣根などの建造物に付随する工作物を設置することもあり、材料や技法、時代などによって異なる景観を作り出し、そのユニークさが、文化的景観の特異的景観要素となっている。

たとえば、農耕地、平地林、森、山々、野原、川原など、農業の生産地や、居住地、生業によってもそれぞれの姿が異なり、地形的特徴を利用した集落では、日照や、方角（山や海の方角に向かって設置されている等の例）によっても、その集落の個性が現れる。

水は、高低差を利用して流れるものであるため、集落の共同利用の水場がある場合は、山などの高い所、もしくは湧き水などをためておく貯水槽や井戸、堰が必ずあり、使った水を流す排水溝があるのが一般的である。

交通に関する文化遺産の特徴

水運は、交通形態の一つであり、道路と同じカ

テゴリーである。河川、水路、運河、河岸などは、都市における景観であり、都市空間とともに広い範囲を俯瞰して評価する必要がある。一部分に残っている歴史的な表情や痕跡を見つけるだけでなく、その場所が持つ意味、そして、社会的、空間的観点から導き出された場所の歴史的遍歴、都市の形成過程に注目する必要がある。建造物、道路、路地、街区、用水路、広場、庭園、共有空間、公共空間、プライベートな空間など、それぞれを細かく見る必要もある。

多角的観点から観察し、停滞している場所と常動の場所を見出し、それぞれの役割や特性を把握する必要もある。天候や季節によっても、その場所の持つ個性は異なる。使う人によってもその場所の役割や利用の仕方が異なる場合もある。個人的嗜好や慣習、集団的記憶によって形成されるもの、あるイベントによって記念碑的存在となる場所など、固定化された形態はなく生きた空間であることが、交通に関する文化遺産の特徴である。今回の水運遺産も、この生きた空間であり、成長し続けている文化遺産といってよい。

水運の場合、河川や湖、池をどのように利用しているのかというのが、その実態をつかむキーポイントとなっている。棚田や里山のように、農林水産業に関する土地利用の方法と同じで、河川をどのように利用しているのか。そこに住む人々が、日常生活や生業の中でどのように接しているのか。という点に焦点をあて、その実態について考察する必要がある。

交通については、常に景観構成要素が流動的であり、かつ、そのわずかな変化を見逃しやすい。そこで、都市開発や歴史の中で時間とともに消えてしまったものを見つけることで、どのような変化が起きていたのかを探求し、文化の表出や文化的景観の構成要素を捉え考察する研究が一番わかりやすい研究方法である。

文化的景観の形式と分類

UNESCO では、文化的景観を暫定的に3つのグループに分類している。

① 意匠化された景観

人間の意思に基づいて意図的なデザインがなされ、設計が行われている景観。

例) 庭園、公園、広場など

② 有機的に進化する景観

a. 継続して利用されており、利用形態によって少しずつ改変されたり、修繕されたりしながら利用されている景観。

例) 茶畑など、農林水産業などの産業と関連する景観など

b. 遺跡の周囲に残っている環境の中で固定された(化石化した)景観

例) 遺跡等、史跡名勝天然記念物等と一体となり一つの重要な要素を形成する景観

③ 相互に響き合う景観

信仰や宗教、文学、芸術活動など、直接関連する景観

例) 那智瀧(修行のための場所)など

上記の分類に従って、ケンブリッジのケム川河岸にみられる景観を同定してみると、バックと呼ばれるケム川右岸の芝や樹木により計画的に作られた裏庭は、人間の意志に基づいて意図的にデザインがなされ設計がされている①意匠化された景観に分類される。

また、水車や家畜用の放牧地としての土地の利用は、継続して利用されており、利用形態によって少しずつ年月を重ね、改変されたり修繕されたりしながら利用されている景観であり、②有機的に進化する景観に分類される。

河岸や、渡しとして利用された引き舟のための石舗装などは、遺跡の周辺に残っている数百年の時代を超えて利用されて、日常の生活環境の中で固定された(化石化した)景観である。また、ケム川河岸に建設された、教会から派生し構内に礼拝堂を持つ大学の歴史的建造物群は、③相互に響き合う景観の信仰や宗教、学術活動、文学、芸術活動等の軌跡を示す証左である。

現代（AD. 1945 年以降）の歴史地区の 保全に対する国際的動向

歴史地区の保全に対する国際的動向では、UNESCO の取り組みをまず整理する必要がある。

UNESCO では、機関創設に合わせ、長期計画、中短期計画および具体的な実施プログラム等について計画を立てた⁽²⁸⁾。

機関の目的及び任務については、UNESCO 憲章に掲げられている。

同憲章 第 1 条 2 項 (c)⁽²⁹⁾ では、「世界の遺産である図書、芸術作品並びに歴史及び科学⁽³⁰⁾の記念物の保存及び保護を確保」することを保証している。

よって UNESCO は、国際政策の一つとして「歴史遺産や記念物等の保存及び保護」に取り組んできた。施策の一つとして国際法の樹立、国際勧告の策定と発布を行った。歴史的地区に対しては、歴史的建造物や遺跡等などの文化遺産の保護に関する施策の策定から取り組んだ。AD. 1948 年頃より第二次世界大戦の戦後処理という観点から、被害を受けた地域の調査を行った。その結果、AD. 1954 年には「武力紛争の際の文化財の保護のための条約」（略称 1954 年ハーグ条約）を成立させた。その後 AD. 1960 年代にかけては、人類共有の遺産として文化遺産保護を進める施策（仕組みづくり）や法令整備を行った。

AD. 1962 年には、「風光の美と特性の保護に関する勧告」⁽³¹⁾ を発布した。この勧告は、自然環境を守るための勧告である。この勧告が制定された背景には、AD. 1960 年代に世界規模で行われていた未開地の開拓、都市部の無秩序な発展と大規模開発産業商業主義による新規施設の設置、広域計画による急激な現代化によって引き起こされる文化遺産や文化的景観（風景 / 風光美）の破壊があった。自然的、人工的を問わず、風光の美的価値および野生生物への影響への懸念（文化的意義、学術的意義の衰退）により、勧告制定に至った。

この勧告で、UNESCO 加盟国に対し、風光の

美の保護及び地域的開発に関する当局及び機関、自然の保護並びに勧告事業の発展を委任されている機関及び青少年関係団体の注意喚起が要請された。

歴史的地区の保全及び現代的役割に 関する勧告（AD. 1976 年ナイロビ勧告）

AD. 1962 年以降、歴史的建造物や遺跡の保護に対する国際的要求は高まりを見せ、UNESCO はエジプトのアスワンハイダム建設をきっかけとするヌビア遺跡救済キャンペーンや、世界遺産条約制定（AD. 1972 年）などの国際的な文化遺産保護活動を展開させた。

さらに UNESCO は、「歴史地区の保存」として、遺跡および歴史的建造物群を同等に扱い、積極的な保護政策と国内の当該担当機関の整備、文化遺産保護に関する法令整備、国際協力の体制を確立することに努めた。

その結果、AD. 1976 年（10/26-11/30）第 19 回 UNESCO 総会にて、「歴史地区の保存及び現代的役割に関する勧告」が採択された⁽³²⁾。

この勧告採択に至った背景には、「発展または近代化の口実の下に、世界各地において自身が何を破壊しつつあるかも理解せぬまま歴史的地区を破壊してしまう行為」や、「非合理かつ不適当な再建工事が歴史的遺産に重大な損害をもたらしている世界の現況」があった。また、「画一化及び非個性化の危険に直面」していたこともうかがえる。

ナイロビ勧告では、歴史的地区を、「文化的宗教的および社会的活動の豊かさ及び多様性の最も確実な証拠を後世に伝えるもの」と定義している。

また、「歴史的地区の保全及び現代の社会生活への統合が都市計画及び国土開発における基本的要素である」⁽³³⁾ ことを明示しており、これは、都市計画や国土開発と歴史的地区の保全は表裏一体であることを如実に表している。

加えて、「荒廃、さらには全面的破壊の危険からこれらの掛替えのない資産の救済」を目的とし

た、「国、地域または地方の計画の一部として歴史的地区およびその環境の保護及び蘇生のための総合的かつ精力的な政策」の緊急的政策の必要性を説いている⁽³⁴⁾。

さらに、「建築的遺産及びその都市計画又は国、地域若しくは地方の計画との関連性に関する十分に効果的かつ柔軟な法令が多くの場合で欠如している」という各国の歴史的地区に対する施策・措置における問題を合わせて指摘した⁽³⁵⁾。

都市景観に関する宣言（ウィーン宣言）⁽³⁶⁾

AD. 2003 年第 27 回世界遺産委員会での議論を発端に、AD. 2005 年国際専門家会議勧告に基づいて、同年第 29 回世界遺産委員会で、「歴史性を持つ都市景観の保存管理を踏まえた世界遺産と現代建築に関するウィーン宣言」⁽³⁷⁾を發布した。

ウィーン宣言では、歴史的建造物や工作物、景観を個別に評価し、概念的な包括評価とするのではなく、都市の成り立ちや地域の特性、歴史、景観の持つアイデンティティをすべて把握した上で、何かに固定するのではなく生きているものをそのまま相対的に評価するという方針をとった。つまり、都市景観は、一つの時代に留まっているのではなく、流れいく時間とともに変化したその姿をも発展や成長、時代性というスケールで評価しようという基本理念を持つ。いうなれば、歴史性は決して特定の時代だけでみるのではなく、地域がどのような街へと発展したのか、経済的、社会的、文化的価値観を、時代に合わせてその形態や機能、外観、コミュニティでの浸透度、素材、影響度といった観点から保護や利活用の両面を見ることが重要であることをこの宣言はうたっている。

運河遺産に関する最近の動向⁽³⁸⁾

運河遺産については、AD. 1994 年にカナダで開催された「運河遺産に関する専門家会議」での議論を踏まえ、翌 AD. 1995 年の第 19 回世界遺産委員会（ベルリン）で運河を今後、世界遺産一覽

表へ記載することを推進する分野の一つとして、オペレーショナルガイドラインに記載することを決定した。これを受け AD. 2015 年にも、イタリアのベネツィアで「水辺景観と運河」をテーマとした国際専門家会議が開催された。ここでの議論では、水流の制御と管理、自然環境を変革することへの人間の営み、文化的流通、水路や集水域でのアーカイブ（歴史資料の蓄積）についてディスカッションが行われた。

その結果、文化遺産の構成要素として、運河、水路、橋、水門システム、水力工場（水車、水力発電）、倉庫、河川港、産業考古学などの領域で学術的価値の高い物件、水辺の風景、美的価値を有する歴史的風景などを整理するとともに、具体的保護方法について施策・措置を考える必要があることが認識された。また、水辺の景観では、特定の河岸の現況を把握するだけではなく、歴史が交差する農村と都市の景観について、階層的な分析を行い、欧州における水路のネットワークや、水景の解釈、ウォーターフロントの具体的管理方法等について検討する必要があることが指摘された。

遺跡から解読するケンブリッジの歴史の変遷

ケンブリッジの古い水運遺産をひもとけば、ケンブリッジ城の側に建設された橋の遺跡が最も古く重要である⁽³⁹⁾。この遺跡の場所は、ケム川が大きく蛇行し流れを変える場所であり、小高い丘のふもとに位置している。

この橋を渡った先の陸地にはローマ街道があり、ケンブリッジの市内の道からつながるケンブリッジの南方に存在しているローマ街道（via Devand）を結ぶジャンクションとなっている。

つまりこの橋の遺跡の存在は、常に川の位置が変わらなかったことを意味しており、ローマ街道とローマ街道が直角に交わるこの橋こそが、この地域の交通の要所となっており、そこにケンブリッジ城が築かれたということに他ならない。

また、AD. 1754 年に Essex によって橋の再建設が行われたが、その際に、基礎工事をしていた

時に川の浅瀬に小石を敷き詰めた固い（人工的な）舗装の痕跡が発見された。それは明らかに遺跡であり、古代の人々の創造した痕跡であったことが報告されている⁽⁴⁰⁾。いうなれば、古代人の護岸工事もしくは、川底に築いた道もしくは構造物である。

ここで報告されているように、浅瀬に川石を敷き詰めて舗装をしている河岸の事例（図2）や川底で歩きやすくしている同様の例（図3）を、現在も確認することができる。これも、歴史的価値を持つ重要な文化遺産であり、土木遺産でもある。

ローマ街道の駅の名称である Comboritum の意味は、「渡るための浅瀬」を示しており、ケンブリッジ城の名称は、この Comboritum に由来し、「Comboritum の城」を意味していたと推測できる。このことからケンブリッジは、街の成立当時から水運と深い関係を持っていたことがわかる。

ケム川河岸の特徴

ケム川河岸は、ボックス（Backs）と呼ばれ、ケンブリッジ大学群の裏庭を意味する。代表的なボックスは、以下の通りである。

- ・セントジョーンズ
- ・トリニティ
- ・トリニティホール
- ・クレア
- ・キングス
- ・クイーンズ

これらの土地は、大学の敷地内で、果実や野菜の栽培、家畜の放牧などのために大学が使用してきた。現在でも、工学部の脇のケム川を挟んだ左岸の湿地帯付近で牛が放牧されていたり、家禽類を放し飼っている様子が見られる。

本研究では、ボックスと呼ばれるケム川河岸の歴史の変遷を、古地図から分析することを試みる。

古地図の中では、AD. 1574年の地図^(41・42)が古い地図の一つとして有名である。この地図は、マ

シューパーカー大司教の依頼により描かれた地図であると信じられている。

この地図の特徴は、南からのケンブリッジの町を見下ろす鳥観図で描かれている点である。大通りや路地、大学、小規模住宅などが描かれているが、スケールなどが正確ではなく、誇張された表現の部分もある。一方で、この地図を観察すると、町割りや大学の配置などが、よく理解できる。

特に注目すべき点は、クイーンズカレッジの裏手のケム川に大きな中洲ができていている点である。中洲は、南北に二つに分かれている。

また、クイーンズカレッジの南側には中洲を挟んで両方の河川に、Kings Millとともに2つの水車が記入されている点も興味深い。橋のように、中洲と右岸に橋を渡し、橋の上に小屋を作り、ちょうど河川の中央に歯車をおいて橋全体に屋根を乗せる屋内式水車が設置してあり、もう一つは、左岸の河岸に小屋を建設し、川面に接している壁際に歯車を取り付けた野立式水車が見える。屋内式水車のすぐ脇には、中洲に一段低く人工的に作ったと見られる荷積み場（河岸）が設けられている点にも注目でき、これはまぎれもなく人工的に造成された河岸である。この地図には、当時の人々の生活の様子がよく描かれており、左上の城と町をつなぐ橋「The Brige」のたもとは、船が2艘つながれており、河岸であり船寄せ場（船着き場）とみられるところには、岸壁に設置して船を繫留する目的の数本並んだ係船柱が描込まれている。係船柱は、ボラードというが、この単語の語源はノルマン・フランス語の Bouldard に由来する。また、そのすぐ下には、仕掛け網をつかって船で漁労をしている様子も描かれており、水運としての交通路であり、かつ漁場でもあるという市民の日常生活の場として河川が機能していたことがわかる。

右岸で注目すべき点は、右上にラテン語で町に関する説明が書かれている右岸の東側に描かれた「The Kinges dich（王の溝）」の文字である。「The Kinges dich」の説明には、「今では通りの汚れを洗い流したり、グラントに汚れを洗い流し



図2 橋脇の曳舟のための舗装



図3 河岸から川底に向かって川石が敷き詰められている。

たりするのに便利に使っている。」と書かれている。

この王の溝（運河）は、人工的に造成された土木構造物である。スケールが正確ではないので判別はできないが、機能としては、側溝のような役割を果たしていたのかもしれないが、幅は広く、小船も場合によっては通ることができる程度の運河が、築かれていたことが推測できる。

画面には、「小川を迂回させ、淡水を溝に引き込んだことは、後の人々が感謝するだろう」と、その偉業を称える言葉が添えられているところを見ると、この側溝は、日常生活に大変有用であったのであろう。さらにその東側には小麦とみられる穀物を育てている様子も描かれている。また、右岸でも左岸でも多くの家畜が描かれており、放牧をしている様子がわかる。特に特徴的なのは、左岸の城と町をつなぐ橋のすぐ下流の左岸に牛が描かれているところである。この3匹の牛と他の家畜の違いは、牛がいる場所に、おそらく人工的に作ったと思われる用水路が築いてある点である。古くから川水を自由に引き込み活用していたことがわかる。

AD. 1588年の地図⁽⁴³⁾では、右岸屋内式水車のみが描かれている。この地図は、AD. 1574年より15年近く後に描かれた地図だが、中洲へ渡る橋の数も少なくなり、中洲に設けられていた荷積み場（河岸）も消失している。王の溝は、「The Kings Dyke」と表記してあり、長年に渡って活用されていたことがわかる。

町民の住居については、道にそって隣接する住居同士が壁でつながっている連棟式の住居が建設されており、それはまるで高くそびえたつような擁壁の役割も果たす家壁を持つ住居スタイルである。ケンブリッジは、町と城がケム川と橋によって隔たっており、城への侵入が制限できるようになっていることから、パリのような城壁を持つ城下町スタイルの町ではなかったことがわかる。しかし一方で、Collegeと呼ばれる各大学とその教員や学生が住む寮は、中庭を持つ閉鎖型方形建築（閉じられた空間）様式を持ち、特徴的である。

大学群とケム川の間隔をみると、AD. 1574年

とAD. 1588年のどちらの地図にも共通するのが、ケム川に沿って河岸にほとんどスペースをつくることなく、建造物を建てている点である。ケム川から河岸へ船が寄せられるような船着き場のようなスペースや、ケンブリッジの文化的景観にもなっているボックスと呼ばれる校舎裏のケム川河岸の芝庭のスペースが全く存在していない。現在、ボックスには、ケム川河岸に柳をはじめとする大きな樹木の繁茂や並木路があり、たくさんの船を寄せられるなどらかな河岸もある（図4）。

しかし16世紀の地図をみるかぎりでは、大きな樹木や並木路も、船着き場もほとんどない。例えば、キングスカレッジ裏の芝庭は、16世紀には存在していなかったが、当時の版画などの一次史料から18世紀になるとその芝庭の庭園様式を確認することができる⁽⁴⁴⁾。よって、整理して考えれば、中世の風景は、現代の風景とはずいぶん異なっていたと考えるのが適当であろう。

では、いつの時代に現在のような穏やかなケンブリッジの風景が完成したのであろうか？ その謎を解くには、さらに17世紀、18世紀にわたって歴史をひも解いていく必要がある。

同様に、昔のケム川河岸の様子をAD. 1774年に描かれた絵画⁽⁴⁵⁾で確認すると、ケム川にかかる橋梁は、今もなお同じ位置にあることが確認できた。

また一方で、橋げたはそのままではあるものの、欄干のデザインや橋脚脇の河川へのアクセス部分が一部改変されていたり、橋を渡り大学へ入るためのゲート（門戸）のデザインに変化が認められた。結論としては、同じように見える文化的景観の構成要素も、数百年のオーダーで、少しずつマイナーチェンジしているということを確認することができた（図5）。

さらに、Trinity Collegeの橋Bridgeと図書館Libraryの裏にある芝庭を事例に、AD. 1767年に描かれた版画作品⁽⁴⁶⁾と今、現在の様子（図6）を比較すると、一目瞭然であるが違いが見られる。トリニティカレッジの名物図書館の裏にある18世紀のバックの景観は、河岸との境界がはっきり設けられており、川底も深く川も順調に流れ



図4 キングスカレッジの裏の芝庭 (ボックス)



図5 橋げたは18世紀のままであるが、欄干のデザインは、変化している。



図6 河岸の樹木は、種類も樹形も変化している。

ている。また、対岸に渡るための橋が設けられている。一方、現在の同一の場所の様子とえば、河川と陸地の関係性が少しあいまいになっており、ケム河岸の状況とえば、河岸の位置が低くなり、水位と川底が上がってきているのがわかる。川底に土砂堆積が感じられるとともに、川床幅に拡がりが見られる。これは、河岸の浸食によるバック区域の面積の変化や河岸の形態、つまりケム川へのアクセスするための土木構造物の変化を表しており、文化的景観の経年変化をも明示するものである。

また16世紀に水車があったQueen Collegueの橋付近(図7)では、現在は、船置き場となっている。場所の地名は、グラントプレイスと呼ばれ、船着き場には、ラウンドレスグリーン(Laundress Green:洗濯女の緑地)と呼ばれる河岸がある。橋のたもとには、Scudamore's Mill lane Punting Station(：愛の盾家の水車の曲輪-船着き場)と、フランス語由来の名称の水車が

あったことを示す地名が残っている。

現在は、16世紀にはあった中洲は見えないため、景観もかなり異なっているが、地図上では、浮島となっていないだけで、川底には砂溜りができており、水量によっては中洲が出てくる可能性はあるように見受けられる。この水が滞留しているボート置き場から、ケム川は二俣に分かれる。川と川の間空間は、決して歩けないわけではないと思われるが、湿地となっておりぬかるんでいる。しかしただの湿地ではなく牛や家禽類が放牧されており、のどかな田園風景となっている⁽⁴⁷⁾。地名も、Sheep's Green, Lammas Landといった牧場のような名称がつけられている。

さらに南下した所にあるケンブリッジ大学工学部の前を走るケム川を横切るザフェンコーズウェイ⁽⁴⁸⁾というサイクリングレーンを備えた大きな道路が、ケム川を直角に横断することにより、川の流れを変えてしまっており、16世紀のようにまっすぐ南に川が流れずに、大きく右岸を削るよ



図7 16世紀には、水車があった付近

うに蛇行し、南西へと川は流れている。

AD.1762年に描かれた放牧の様子を表す版画は、建造物の位置から、左岸の様子だとみられるが、周辺には、道も堤防も築かれていない。川というよりは、人工的に切り開いた痕跡がみられるため、18世紀以前は人工的な農耕のためなら水路が築かれていたと思われる。

結 論

本研究では、中世都市として名高いケンブリッジを事例として、歴史的価値を持つ水運遺産が、どのように保存されているのかについて考察した。研究の結果、大学などの歴史的建造物は、残存しているものの、中世の風景がそのまま残されていると信じられてきたバックスと呼ばれる大学

の裏庭を含むケム川河岸は、ほとんど歴史的な風景が残されておらず、現在残されている風景は、いわゆる環境の中で固定された（化石化した）景観ではなく、18世紀以降に造成された意匠化された景観であった。つまり、中世の景観と考えられていた景観が16世紀頃の歴史的文化遺産がさらに変化した後の景観であったということが判明した。

生活は少しずつ変化し、利用に合わせて建造物や利用方法も改変する。建造物などは、修復方針などを定め、修理方法に細かい規定を課しているため、オリジナルのスタイルを保ちやすい。一方で、景観や土木遺産、道路、水運遺産などは、利用頻度や活用方法などによって、常に変化が生じる。その変化の積み重ねが、最終的に大幅な改変となって、元の形をとどめていないという結果に

なっていることがわかった。つまり、水運遺産などの土木、基礎的構造物に関係する遺産は、有機的に進化する特徴を持ち、それが景観に影響を与えている。継続的に利用され、利用形態や工学技術等の進歩により少しずつ改変されたり修繕されたりしながら常に変化している文化遺産である。変化をし続けながら人間との関わり合いを深め、いつしかその構造物が、利用する人間にとってのスタンダードとなり、基礎的なものと認知されるようになる。この自然に芽生えた愛着こそが文化的景観の文脈を形作るものであり、一つの歴史を形作っている。

しかしながら、考古学的観点からいえば、変化し続ける構造物は厳密には、遺跡とはなりえないものである。

農村環境や道路、河川の護岸工事、曳舟のための敷石など、土木、産業遺産に関する遺物にも沢山の人間の知恵が詰まっている。これらの文化遺産の保全と保護については、まだ十分な施策が立案されていない。今後、生活の一部として利用をしながらも、どのように歴史的痕跡と人智を残していくのが文化遺産保護政策における課題となるだろう。

《注》

- (1) Her majesty's Stationery office, *Cambridge: The Growth of the City*, London, 1959, pp. 32-pp. 43
- (2) Her majesty's Stationery office, *Cambridge: The Growth of the City, London, 1959*, pp. 32-pp. 43
- (3) Robert Willis, M.A., F.R.S., *The Architectural History of the University of Cambridge, and of the Colleges of Cambridge, and Eton*, Cambridge at University Press, Vol. 1, 1886.
- (4) ©Professor John Palmer, George Slater, Anna Powell-Smith and opendomesday.org, <https://opendomesday.org/place/TL4458/cambridge/>
- (5) The kingdom of the East Angles, The kingdom of East Anglia; East Engla Rīce (アングル語); Regnum Orientalium Anglorum (ラテン語)
- (6) Early history of Ely, in a Chronicle of Ely, Medium: Ink and pigments on vellum, Date: 1505, Shelfmark: Harley MS 3721, Item number: f.1r, Length: 21.8, Width: 15, Scale: Centimetres, Genre: Illuminated manuscript

- (7) <https://www.cam.ac.uk/about-the-university/history/early-records>
- (8) <https://www.cam.ac.uk/about-the-university/history/early-records>
- (9) W.W.Rouse-ball, Cambridge notes, chap. Xvi, p. 196
- (10) Willis, Robert, Clark, John Willis, *The architectural history of the University of Cambridge and of the Cambridge and Eton*, vol. 1, Cambridge at the university press, 1886
- (11) Willis, Robert, Clark, John Willis, *The architectural history of the University of Cambridge and of the Colleges and Eton*, Vol. 1, Cambridge at the University press, 1886
- (12) William R. Shepherd, 《Mediaeval Universities,》 *Historical Atlas*, Henry Holt and Company, New York, 1911, p. 100
- (13) <https://www.cam.ac.uk/about-the-university/history/early-records>
- (14) The late Robert Willis, M.A., F.R.S. JACKSOX-IAN Professor in the University of Cambridge, and Some time Fellow of Gonville and Cails college, Edit with Large Additions, and brought up to the present time, John Willis Clark, M.A. Late fellow of Trinity college, Cambridge, *The architectural history of the University of Cambridge and of the Colleges of Cambridge and Eton*, vol. 1, Cambridge at the university press, 1886
- (15) hostels [hospitid]
- (16) Church of S. Peter (現在の S. Mary the Less 教会)
- (17) Ibid., pp. xxxiv
- (18) H.Denifle, *Die Entstehung der Universitäten des Mittelalters bis 1400*, 1885
- (19) H. E. Salter, *Mediaeval archives of the university of oxford*, England, the oxford university press, 1922
- (20) J. P. C. Roach, *The Victoria History of the County of Cambridge and the Isle of Ely*, Vol. III, The City and University of Cambridge, Oxford University Press, 1959
- (21) 1381年 黒死病および百年戦争の影響による高税による疲弊と経済停滞、貧困、政治的緊張などによって引き起こされた農民蜂起。主にイングランド南東部で行われた。農民は、法廷記録を焼却処分し、刑務所を打ち破り罪人を開放した。課税の削減、農奴制廃止、国王によって派遣された高官と裁判官等の解任要求などの反政府運動を展開した。
- (22) <https://www.cam.ac.uk/about-the-university/history/early-records>
- (23) <https://cudl.lib.cam.ac.uk/view/MS-UA-COLLECT-ADMIN-00003/9>

- (24) 鈴木利章, 中世におけるケンブリッジ大学の諸問題, 史林, 1974, pp. 80-81
- (25) Heritage Gateway (ALGAO:Association of Local Government Archaeological Officers, English Heritage, IHBC:Institute of Historic Building Conservation), https://www.heritagegateway.org.uk/Gateway/Results_Single.aspx?uid=MCB2268&resourceID=1000
- (26) https://www.heritagegateway.org.uk/Gateway/Results_Single.aspx?uid=MCB2268&resourceID=1000
- (27) Charter of Edward I confirming the privileges of the University of Cambridge (UA Luard 7*), <https://cudl.lib.cam.ac.uk/view/MS-UA-LUARD-00007-AST/1>
- (28) AD.1943年からAD.1946年にかけてのプログラム設定
- (29) 「次のようにして知識を維持し, 増進し, 且つ普及すること。世界の遺産である図書, 芸術作品並びに歴史及び科学の記念物の保存及び保護を確保し, 且つ関係諸国民に対して必要な国際条約を勧告すること。教育, 科学および文化の分野で活動している人々との国際的交換並びに出版物, 芸術的及び科学的に意義のある物その他の参考資料の交換を含む知的活動のすべての部門における諸国民の間の協力を奨励すること。いずれの国で作成された印刷物及び刊行物でもすべての国の人民が利用できるようにする国際協力の方法を提案すること。
- (30) 日本の官公庁発行の仮訳や公文書等では, 「Scientific」を「科学的」と表記することが多い。一方, 経験的に, ヨーロッパでは文脈上では, 「学術的」という意味合いで用いられているように思う。UNESCO憲章における用法も, 「学術的」の方が妥当と思われるが, 本論文では, 文部省仮訳の表記に従った。
- (31) UNESCO, Recommendation concerning the Safeguarding of the Beauty and Character of Landscape and Sites
- (32) <https://www.icomos.org/publications/93towns7o.pdf>
- (33) UNESCO, Recommendation concerning the Safeguarding of the Beauty and Character of Landscape and Sites
- (34) UNESCO, Recommendation concerning the Safeguarding of the Beauty and Character of Landscape and Sites
- (35) <https://www.icomos.org/publications/93towns7o.pdf>
- (36) <http://whc.unesco.org/uploads/activities/documents/activity-47-2.pdf>
- (37) WHC-05/15.GA/INF.7 Paris, 23 September 2005 Original, Item 7 of the Provisional Agenda: Adoption of a Declaration on the Conservation of Historic Urban Landscapes Vienna Memorandum on “World Heritage and Contemporary Architecture - Managing the Historic Urban Landscape” and Decision 29 COM 5D
- (38) <https://en.unesco.org/news/waterscapes-and-historic-canals-cultural-heritage>
- (39) Robert Willis, M.A., F.R.S, Jack Sonian, *The Architectural History of the University of Cambridge, and of the colleges of Cambridge and Eton*, p. 7, 1886
- (40) Robert Willis, M.A., F.R.S, Jack Sonian, *The Architectural History of the University of Cambridge, and of the colleges of Cambridge and Eton*, p. 7, 1886
- (41) Cambridge, Richard Lyne, Oppidum Cantebri-giae (Item no. 7 in volume SSS.12.1), 1574, <http://cudl.lib.cam.ac.uk/view/PR-SSS-00012-00001-00007/1>
- (42) John Willis Clark and Arthur Gray, *Old plans of Cambridge, 1574-1798*, pp. 1-17
- (43) Cambridge, from Description of England, with arms of the nobility, Created:1588, Format:Body-colour /, MapCreator:William Smith, Usage terms:Public Domain, Held by British Library, Shelfmark:Sloane MS 2596, <https://www.bl.uk/collection-items/plan-of-cambridge>
- (44) The BL King’s Topographical Collection: *《King’s College. Chapel and Clare Hall in the University of Cambridge.》*, Title: *《King’s College. Chapel and Clare Hall in the University of Cambridge.》*, Author(s): Harraden, Richard Bankes, British Library shelfmark: Maps K. Top. 8.58.f., Place of publication: [Cambridge & London], Publisher: Publish’d October 12.th 1797 by R. Harraden No. 16 Little Newport Street Leicester Square London – And David Hood Printseller Cambridge., Date of publication: [1797], Item type: 1 print, Medium: etching and aquatint, Dimensions: sheet 45.0 x 59.6 cm [trimmed within platemark], Former owner: George III, King of Great Britain, 1738-1820
- (45) Title: *《View of Clare Hall, Cambridge.》*, Author(s): Lamborn, Peter Spendelowe, British Library shelfmark: Maps K.Top. 8.65.b., Date of publication: [before 1774], Item type: 1 drawing, Medium: pen and black ink with monochrome wash, Dimensions: sheet 17.3 x 24.1 cm, Former owner: George III, King of Great Britain, 1738-1820
- (46) Title: *《A View of Trinity College-Bridge & Library, & Part of St. John’s College in the University of Cambridge.》*, Author(s): Lamborn, Peter

Spendelowe, British Library shelfmark: Maps K.Top. 8.63.d. Place of publication: [Cambridge], Publisher: [P.S. Lamborn], Date of publication: [1767 c.], Item type: 1 print, Medium: etching and engraving, Dimensions: platemark 38.0 x 53.0 cm., Former owner: George III, King of Great Britain, 1738-1820
(47) Title: *《King's College Chapel, and Clare Hall, Cambridge.》*, Author(s): Lamborn, Peter Spende-

lowe, British Library shelfmark: Maps K. Top. 8.58.l. Place of publication: [Cambridge], Publisher: [P.S. Lamborne], Date of publication: [1762], Item type: 1 print, Medium: etching, Dimensions: sheet 17.0 x 21.9 cm [trimmed within platemark], Former owner: George III, King of Great Britain, 1738-1820
(48) The Fen Causeway